

平成 21 年 5 月 10 日現在

研究種目：若手研究(B)
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18730441
 研究課題名(和文) クラスまたは集団特性により現れる，動的学校画の描画特徴の検討
 研究課題名(英文) The study of characteristics of elementary and junior high school student's Kinetic School Drawings, caused by their class and group of particularities.
 研究代表者
 田中 志帆(TANAKA SHIHO)
 青山学院女子短期大学・一般教育科目・准教授
 研究者番号：30325980

研究成果の概要：不登校の児童生徒が通級する適応指導学級と，外国人労働者の子供たちが日本語教育を受けている日本語教室の，二つの集団を対象に動的学校画の集団施行をした。そこで得られた描画特徴から，不登校児童の動的学校画の特徴，外国人子女の子どもたちの動的学校画の特徴について検討した。さらに，学級崩壊を経験した小学校のある学級も対象にして動的学校画と統合型 HTP を施行。その結果から学級の荒れに関連する児童の心理について考察した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	600,000	0	600,000
2007年度	500,000	0	500,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,600,000	150,000	1,750,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学

キーワード：動的学校画，アセスメント，適応指導教室，日本語学級

1. 研究開始当初の背景

2003年に科学研究費若手B「学校画を用いた学級崩壊現象に関するアセスメント，支援可能性の検討」の助成を受けてから，動的学校画(以下，略してKSD)の日本における基礎研究を蓄積し，学会等での発表を行ってきた。これまでは，児童生徒の学校適応や，うつ傾向，担任にとって気がかりな子，知能テストの結果と動的学校画との関連を毎年1000人を超す大規模調査データによって検討してきた。その過程で，本研究の必要性が生じる課題が浮上した。

(1) 米国のデータよりも，日本の描画の人物像がより大きく描かれる傾向にあった。そのため米国の先行研究で述べられているアセスメント基準が，そのまま日本の描画にも当てはまるのかどうかの疑問が生じた。この点を検討する必要性を感じた。

(2) 大規模調査で確認された，描画者により自覚されている学校不適応の心情と，動的学校画の描画特徴との関連の妥当性を検証。実際に学校への不適応が深刻化した不登校の児童生徒の動的学校画に，これまで確認されたようなある種の傾向，特徴が見受けられ

るのかどうかを検討したいと考えた。

(3) 動的学校画が教育現場で生じている課題に、役立ちうるかどうかを検討したい。研究者が勤務していた大学のある県では外国人労働者の児童生徒の未就学、不登校、頻繁な転出転入、日本語習得について多くの課題を抱えていた。故に、外国人子女の、学校生活での心理を動的学校画のアセスメントを用いることで、推測し、より良い教育支援に役立てたいと考えた。

(4) 集団特性に着目することで、個人差の検討だけでは見いだせない側面を考察したいと考えた。

以上の背景から、研究を意図した。

2. 研究の目的

申請時に何をどこまで明らかにするかについては、以下のように目的を設定した。

(1) G 県の学校教育の課題となっている外国人子女クラスについて、研究と考察を試みたい。外国人子女である児童の描画特徴は、日本人の児童の子供とは異なる可能性がある。また、日本の小学校に徐々に根付き、定着するにつれ、描画の特徴も変化するのではないか。クラスにおける文化的相違と融合が描画に投影されるのかどうかを明らかにしたい(3年間の継続研究として)。

(2) 4年にわたるこれまでの研究で、小学校低学年で、時折、学校画の教示とかけ離れたゲームの場面(爆弾の破裂、銃で撃たれる)を描く子どもが見られた。ゲームの嗜好性の程度には、都市部と山間部ではおそらく違いがあるだろう。都市部の児童と、山間部の児童の描画に相違が見られるかどうかを明らかにしたい。

(3) 学力の違いという観点、また学級崩壊が生じているような荒れが見られるクラスと、そうではないクラスの児童の描画特徴に相違が生じるのかどうかについて明らかにしたい。

3. 研究の方法

(1) 研究1

調査対象: 在日外国人児童は、G 県 I 市の3つの小学校の日本語教室に通級中の1年~6年生までの児童71名(男子35名、女子36名)。出身国は、ブラジル、ペルー、チリ、モンゴル、フィリピン、スリランカ等である。日本人児童は、同じ県内隣接市の公立小学校の保護者から研究協力の許可を得た日本人児童31名(男子13名、女子18名)。

調査期間: 外国人児童に対する調査は、2007年11月~2008年10月まで。日本人児童に対しては、2006年10月に実施した。

調査方法・内容: 動的学校画を学校内の教室の一室を借りて、個別に実施した。描画終了後、描画に対するインタビューを実施した

(年齢、現在の学年、何を描いたか、先生や友達はどうな人物か等、日本に來日した学年、年数等)。**スコアリング:** KFDスコアリング(O'Brien&Patton,1974/加藤・神戸,2000)を元に作成したKSDスコアリング項目(田中,2004)と、Andrews&Janzen(1998)のKSDスコアリングシートの一部を用いて評定を行った。さらにグッドイナフ人物画知能検査の項目を用いて精神年齢を算出した。なお、調査後、日本語教室担任と、校長、教頭に、調査結果を報告し、アセスメントから推測されたことをベースに、今後の教育的支援のポイントについてコンサルテーションを行った。

(2) 研究2

調査内容: <適応指導教室>KSDを適応指導教室に通級している児童生徒に、教室内の部屋で個別に実施した。また、個別にインタビューを行い、人物像を描いた順番 この絵は何をしているところを描きましたか?

描いた友達はどんな子で、どんな先生ですか? 絵に描いたことは最近ですか、それとももっと昔のいつ頃のことですか? この場面の後、どんなことが起きると思いますか? を尋ねた。<通常学級>KSDを教員が授業時間中に実施し、回収した。スコアリングはO'Brien&Patton(1974)の客観的スコア基準を元に作成した田中(2004)の基準と新たに設定した項目に基づいて行った。なお、調査後、適応指導教室の小、中学生の希望者に、描画のアセスメントの結果をフィードバックした。

調査対象: A 県の適応指導教室に通級中の小学3年生から中学3年生までの調査に同意した児童生徒、計27名(男子10名女子17名、平均年齢13.48歳)。対照群の児童生徒は、A 県の小・中学校に所属する小学3年~中学2年の全児童生徒3014名の中から、適応指導教室の児童生徒の性別と中3以外の学年が一致する27名をB中学校とC中学、D小学校(学年は中2が上限)からランダムに選定した。**調査期間:** 通常学級は2005年10月~12月。適応指導教室は、2006年1月~2月と2007年10月

(3) 研究3

調査内容: 学級担任経験者から、授業が成立しにくい状況になった都内A小学校の2クラスを対象に動的学校画を実施した。また、そのうちの1クラスで、別の日に統合型HTP法を実施した。次に、学級担任2名の希望から担任がクラス内で特に配慮を必要としている児童と、その理由についての情報を得て、動的学校画を元にしたアセスメントを行なった。後日結果をフィードバックしている。

調査期間: 2008年3月

調査対象: 小学校3年生と4年生の2クラスの69名を対象とした。

(4) 研究4

調査・研究内要：2003年から毎年実施したG県での動的学校画の公立学校7校での調査に継続的に3年以上描画を提出した児童生徒を抽出し、縦断研究として発達の变化の追跡的検討を行う。

調査期間：2003年～2007年

研究方法：3年以上連続して描画提出された児童生徒の描画を、O'Brien&Patton(1974)の客観的スコア基準を元に作成した田中(2004)の基準と、カナダでの先行研究(Andrews&Janzen, 1998)に基づく新しいスコアリング基準から、再度スコアリングを研究者と学生研究協力者2名によって現在、進行中である。

4. 研究成果

(1) 研究1

結果

調査対象者の概要外国人児童の平均年齢は8.95歳(SD=1.80)、日本人児童の平均年齢は8.68歳(SD=1.49)。日本居住年数は、平均5.28年。日本生まれの児童もいたが、来日して2か月未満の児童もいた。DAMから算出した精神年齢は、日本人児童で7.71歳(SD=1.42)外国人児童では7.75歳(SD=1.52)で差はなかった。

日本人児童と外国人児童の描画KSDの描画特徴で、日本人児童と外国人児童で出現率に有意差のある項目の一部を以下に示す。

	日本人児童	外国人児童
カッコ内は%		
<活動レベル>		
立っている自己像	4(12.9)	< 30(42.3)
動作をしている自己像	12(38.7)	> 14(19.7)
<友達の顔がない理由>		
後ろ向きだから	7(100.0)	> 4(44.4)
<自己像の眼の描画>		
瞳のない眼	14(45.2)	> 9(12.7)
瞳のある眼	10(32.3)	< 55(77.5)
<友達像の眼の描画>		
瞳のない眼	11(35.5)	> 8(11.8)
瞳のある眼	12(38.7)	< 51(75.0)
<先生像の眼の描画>		
瞳のない眼	17(54.8)	> 8(12.3)
瞳のある眼	10(32.3)	< 53(81.5)
<友達像の向き>		
後ろ向き	8(25.8)	> 4(5.9)
<先生像の向き>		
正面	22(71.0)	< 58(89.2)
<学習状況描画>	11(35.5)	> 13(18.3)
<太陽・雲描画>	1(3.2)	< 13(18.3)
<ドッチボール>	3(9.7)	> 0(0.0)
<構造の強調>	10(32.3)	< 40(56.3)
<仲間との問題>	3(9.7)	< 23(32.4)

考察

外国人児童は眼の描画で瞳を描く率が高く、人や周囲の環境への関心が非常に高いことが推測された。だが描画内容的には、構造の強調といった社会的な相互作用からの逃避を示唆するもの、友達の顔が意図的に省略

されているものが多く、ジレンマが生じている可能性が推測された。また先生像の大きさ、友達像の大きさの平均値は、日本人児童の方が有意に大きかった。今回、意外にも身体像の省略、手や足の描画には出現率に差はなかった。興味深いのは、描画者の担任や日本語教員を窓枠等で包囲した描画が頻出したことであり、外国人児童は日本人児童よりも、担任や日本語教室の教員を特別視し、心理的な依存度が高いことが考えられた。

(2) 研究2

結果

適応指導教室の児童生徒が描いたKSD

不登校になった学年は、中学1年が最も多く(51.9%)、次に小学6年生、中学2年であった。適応指導教室に通級を開始したのは、中学2年生が13名と最も多かった。本来の所属学校での生活場面を描いたのは女子13名に対して男子が2名、適応指導教室を描いたのは男子が7名、女子が2名で²検定の結果、性差が認められた。

2 通常学級の児童生徒の描画との相違

以下、今回の調査で²検定で有意差が認められた変数と残差分析の結果である。数値は出現率(%)である。

p<.01**, p<.05*, p<.10†

変数	N	適応	通常
協力レベル			
働く	27	22.2	> 0.0†
眼が無い描画			
後ろ向きだから	9	44.4	< 63.6*
正面向きだが無い		44.4	> 0.0*
友達の数			
1人	27	44.4	> 0.0**
2人		25.9	< 63.0**
3人		11.1	< 37.0*
8人以上		11.1	> 0.0†
必須アイテム			
全ての人物像あり	27	40.7	< 100.0**
先生or友人がない		55.6	> 0.0**
先生像の省略			
全身像	27	18.5	< 74.1**
足脚の省略		14.8	> 0.0*
全身が無い		18.5	> 0.0*
友達像の省略			
全身像	27	25.9	< 70.4**
自己像の向き			
正面	27	70.4	> 40.7*
横向き		11.1	< 33.3*
友達像の向き			
正面	27	70.4	> 40.7*
横向き		18.5	< 29.6†

考察

今回の調査対象の適応指導教室に通級している児童生徒は、正面向きの自己像を多く描くが、眼を省略して描く傾向があると推測された。眼の省略は調査者に「自分を知られたくない」という防衛が働いたためであるかもしれない。或いは、眼は心の窓であり人と交流し接触するための器官であるので、「学校」の人間関係を回避したい気持ちの投影で

あるかもしれない。これまでの研究から、正面向きの自己像は友人、教員への関心を意味すると考えられるが、今回、人物像同士の向かい合いが少なく正面向きの人物像を並列して描く構図が見られるため、低学年の児童に多い人物像の並列に類似しているとも考えられた。また、適応指導教室の生徒は自己像よりも教員や友達像を描くことに抵抗感をより強く感じる事が推測された。なお今回の結果で認められた有意差は、従来研究の描画特徴の出現率からも妥当なところがあるが、データ数が少数であることや、対照群が適応指導教室の児童生徒と同一小中学校ではないので、慎重に考察すべきではあろう。

(3) 研究3

結果と考察

現在、HTP の統計解析中であるが、以下のようない知見が得られている。

統合型 HTP と動的学校画の相違について

統合型 HTP では、人物像を細かく指定しないため、動的学校画よりも描画の自由度は高く、またより心の深層や内的な状態を如実に表す描画が多かった。たとえば、母子家庭の児童は一人で外にいて、家内にいて姿のない母親から「ごはんよ」と声をかけられている絵を描き、母親がうつ病で通院歴のある児童は、家の外で夕暮れの中、小さな自己像が一人で肉を焼いてたたずんでいる絵を描いていた。動的学校画では、前思春期的な描画パターンが見つけられ、HTP と比べて社会的な場面での自己の側面が描かれていた。

動的学校画に見られた荒れた学級の心理

被虐待経験を持つ児童は、動的学校画で鉄棒に逆さまにぶら下がった状態で、クラスメートからボールをぶつけられるところを描いており、環境そのものを被害的に捉えていることが推測された。また、衝動的な内容も見受けられ、授業時間にふさわしくない行動をとる自己像や他者像が描かれていた。

(4) 研究4

結果と考察

大量データのため、未だ現在スコアリング中であるため成果はまだ発表段階ではない。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計2件)

田中志帆 動的学校画と小・中学生の学校適応との関連 6 日本語学級に在籍するニューカマーの子どもたちの描画 日本心理臨床学会第 28 回大会発表予定(発表論文集は現在印刷中) 2009 年 9 月 20 日~22 日のいずれか 明治学院大学

田中志帆 動的学校画と小・中学生の学校

適応との関連 5 適応指導教室に通級している不登校の児童生徒の描画傾向について 日本心理臨床学会第 27 回大会発表論文集 p233 2008 年 9 月 6 日 つくば国際会議場

[その他]

ホームページ等

研究成果は、青山学院女子短期大学ホームページ上の教員情報に、研究業績情報として掲載。

<http://raweb.jm.aoyama.ac.jp/agwhp/KgApp?kyoinId=ymdyyyobggy>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田中 志帆 (TANAKA SHIHO)

青山学院女子短期大学・一般教育科目・准教授

研究者番号：30325980